

「水利用」「環境保全」。その折り合いを、どのようにつけていくか。

Case : 4

上流から下流まで住民参加
海岸を美しく
流域住民で海岸清掃

大井川の清流を守る研究協議会が主催する海岸清掃活動は毎年9月ごろ実施されています。「大井川の上流から下流まで一つになって環境保全に取り組もう」とするもので、昨年は本町から、議会議員、大井川の再生を考える会、温暖化防止地域協議会、地元企業、役場職員、有志の皆さんなどが参加し、下流域の人たちと協力し合い清掃活動を実施。大井川が関係する御前崎市海岸、吉田町海岸、牧之原市海岸など、それぞれの地点に分かれ、流木やビニールなど、大小さまざまなごみを拾い集めました。

昨年の活動には約700人が参加。上・中・下流域の人々の、交流の場にもなっています。



大量のごみを集めた海岸清掃活動

Case : 3

山犬段にブナの苗木を植樹
水源地の保全
人の手で森を育てる

森林レクリエーション推進協議会と、町内の事業所などが協力し合い昨年4月、山犬段にブナの苗木を植樹しました。「川の恵みを、森林に還元したい」という、流域住民の思いから始まった水源地保全活動です。

ブナの苗木は、中部電力㈱大井川電力センターから寄贈されたもの。約40人の参加者が集まり、山犬段の町有地約1000㎡の範囲にブナの苗木を植樹しました。

参加者たちは「この苗木が周辺のブナのように立派に成長して、やがて水源地の保全につながってほしい」と願いを込め、丁寧に植樹をしていました。この活動は3年間継続して実施されています。



子どもから大人まで参加した山犬段植樹

Case : 2

接岨湖フェスタでふれ合い
水源地の誇り
川と親しむイベント

水源地の誇りを後世へとつなぐことを目的とした接岨湖フェスタは、夏に開催されています。平成18年に開かれた「森と湖に親しむつどい2006」の継続事業として開かれているこのイベントは、昨年が2回目の開催。1500人ももの来場者が、長島ダム周辺へ訪れました。

接岨湖でのカヌー教室や、大井川の流木を利用した木工工作など、川と身近にふれ合うイベントとして、流域の人たちに親しまれています。

長島ダムふれあい館には、大井川に關係するたくさんの展示物があります。水源地川根本町の使命を、多くの人に知ってもらおうという役割も担っています。



接岨湖面でカヌー教室を楽しむ

Case : 1

目で見て初めて知ることも
実際に訪れる
大井川の現状を視察

大井川の清流を守る研究協議会では、流域住民に大井川の現状を知ってもらうため、毎年視察会を実施しています。昨年は秋に実施。高校生を含む21人の参加者が大井川の現状視察に出向きました。島田市神座の大井川用水分水工を始め、塩郷ダム、大井川ダムを視察。長島ダムでは堤体内部の見学も実施し、大井川が現在どのような状態にあるのかを肌で感じました。

参加者たちは「わたしたちが飲んでいる水は、どのように取水されているかなど、知らないことがたくさんあった。これからも、わたしたちを支えてくれている大井川のことについて考えていきたい」と話していました。



ダムや堰堤などで取水の状況を見学

大井川問題の根幹は「命を守り、命をつなげていく」ということ。



大井川の清流を守る研究協議会副会長

西原茂樹 牧之原市長

大井川の問題だけでなく、何の問題を解決する場合でもそうですが、「楽しくやる」というのが一番大事です。楽しくやらないと、何事も続けていくのは難しい。そして行政が入ると、政治的な要素が絡むため、物事が大変複雑になるんですね。その分苦労も増えるんです。行政の目的としては、税収を増やす、人口を増やすといった面を重要視しなければならないからなんです。しかし、今、一番考えなければならないことは、大井川流域というのは、昔からお互いに密接な関係を持っていたということ。ずっとかかわりを持ってきているからこそ、これからも一緒に考えていくことが大事なんです。大井川は、流域の共通の財産です。杉山会長の言うように、たとえお金にならなくても、重きを置いて考えなければならないんです。本当に大切なのは「命を守り、命をつなげていくこと」なんですから。

これから「仕組み」として、山を守っている人たちが、安心して生活を営めるようなことを、わたしたちが考えていかないとなりません。幸いなことに静岡県には、水源税のような素晴らしい仕組みがあるんですから、今後は、その有効的な活用方法を模索していかなければなりません。